

静岡県における自然学習資料保存事業について

事務局

静岡県では、消失や散逸が懸念される県内の絶滅種を含む貴重種や静岡県を特徴づける種などの重要な標本の収集・保存事業について、自然保護に関心のある県民と共働して実施することになりました。そこで、県では自然保護活動を行っている県内の NPO 法人やボランティアグループなどの任意団体から、その事業実施のための企画提案を募集して、採用された団体と県が委託契約を結び、事業を定められた期間と方法で実施することになりました。

この「自然学習資料保存事業」は、地域の雇用機会拡大を目的とした緊急地域雇用創出特別基金事業に基づく事業のため、作業員などを新規に7名以上雇用することが義務付けられています。

事業期間は、平成 15 年 9 月上旬から平成 16 年 3 月 19 日までの約 7 ヶ月で、平成 16 年度も継続して事業が行われる予定です。今年度の委託予定額は 600 万円で、そのうち 8 割以上は人件費になります。標本等の整理や登録などの作業と保管を行う場所については、三島駅のすぐ北側（三島市文教町）にある静岡県教育委員会三島分室の 3 階と 4 階のいくつかの部屋が確保されています。整理保存にかかる備品や消耗品などの費用は、委託費とは別になります。

この事業は、静岡県が平成 13～14 年度に設置した自然学習・研究機能調査検討会で、散逸が懸念される標本・資料の収集・整理の必要性が強く指摘されたことを踏まえ、「自然学習資料保存事業」として実施されることになりました。今年の 6 月に、この事業を行うための「自然学習資料評価委員会」が設置され、貴重な標本・資料の、①受入の条件・基準、②管理・整理の指針、③収蔵施設の整備方針などの検討が進められ、7 月末に「自然学習資料収集・保存の基本的考え方」という提案書がとりまとめられました。

この事業は、基本的にこの提案書にしたがって行われますが、実施に当たっては「作業手順は提案書を基本としつつ、受託者と十分に調整



静岡県教育委員会三島分室

を図り、効率的かつ効果的に実施すること」という留意事項が記されています。また、「静岡県へ寄附を申し出た方へは、標本・資料は県が適切に保管すること、学習・調査・研究に活用すること、寄附後の扱いは県に任せてもらいたいこと及び今回の受納が博物館建設を担保するものでないことを正しく伝え、その上で寄附者の意思確認をすること」ともあります。

この事業は、県内の自然史標本の保存を訴えてきた私たちにとって、静岡県立自然系（自然史）博物館設立に向けての大きな第一歩にはちがいませんが、県としてまだ博物館を設立するかどうか決めていない現在、博物館のための標本集めとは言えない立場にあります。ただし、標本等を集めるだけでなく、今後さらにこの事業を発展させて博物館設立に結びつけて行けるかは、この事業の成果しだいともいえます。また、集まった標本や標本収集・保管活動自体を、私たちの手で自然環境教育や研究に、積極的に公開して活用していくことも今後の活動の重要な部分となります。

したがって、この事業での標本等の収集や整理保存作業に、会員みなさまの厚いご支援とご協力をお願いしたいと思います。

遠州里山の自然史を歩こう！実施報告

延原 尊美



大日層の貝化石密集層の観察。

きれいな貝化石をとりだすのはなかなかむずかしい。



田辺積さんの貝化石コレクション展示。

たくさん質問が飛びかう。

8月24日(日)午前10:00、晴天のもと、大人38名、小人23名がJR掛川駅南口に集合、バス2台に乗り込み、袋井市大日～油山寺にかけての「静岡県自然史ハイキング」に出発しました。今回の野外自然観察会は、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークと静岡県地学会との共催で行い、会員外にも一般参加を募りました。夏休み後半の日曜日ということもあって、15組の家族連れの方々の参加があったのは、次世代への自然観の継承という点でうれしい限りです。

静岡県自然史ハイキングは、「地質から動植物までいろいろな専門の方のガイドを聞きながら、県各地の自然史をあらゆる角度から深めて歩く」という発想のもとに企画されました。地質も植物も動物も、「自然史」という一つのつながりの中で互いに関係しながら日本列島のなかに息づいています。その地域の自然史をまるごと体感できるような観察会をやってみたいかどうか・・・その第1回として、遠州里山の自然を選んでみました。里山は身近に親しめる自然環境として注目を集めています。静岡の里山は果たしてどのような自然史を語ってくれるのでしょうか？

バスはまず袋井市大日の宇刈川源流域に近い丘陵地に到着。筆者の案内のもと水田奥の沢ぞいに露出する掛川層群大日層を観察し、貝化石の採集を行いました。大日層は約200万年前に沿岸の浅い海で堆積した砂やれきからなる地層で、多くの貝化石を産出することで有名な地層です。貝化石の中には現在では熱帯域にしか生息しないものや多くの絶滅種も含まれており、200万年前の地球温暖化の事件に、参加者一同思いをはせました。貝化石を熱心に掘り出すパワーは大人も子どもも変わりなく、なかには見事な完全標本を得られた方もあられたようです。ともあれ、遠州のなだらかな里山丘陵を構成しているのは、れき・砂・泥の地層であり、かつては海底であったことをまずは実感していただいたようです。

地層観察後、バスで油山寺に移動。昼食を講堂で頂いたあと、昼休みの1時間ほどを利用して、袋井市の田辺 積さんにその場で掛川層群の貝化石標本のミニ展示を行っていただきました。さきの化石採集で完全な標本を採集するむずかしさを実感したためか、参加者のみなさんは、田辺さんの見事なコレクションに驚きと自然への好奇心の声をあげていました。標本と



シダの分類をおそわる。手にしている標本は杉野先生が自宅から持参されたもの。油山寺周辺は植物の採集は禁止されています。

いう形で残される自然の大切さ、おもしろさについても再発見があったのではないのでしょうか？

昼食後 13:30 ごろより、植物観察と野鳥観察の2つのグループに分かれ、油山寺周辺の天狗山にでかけました。植物グループは、杉野孝雄先生、野鳥グループは三宅 隆先生をはじめとする野鳥の会のみなさんのご指導のもと、1時間ほど自然観察を楽しみました。天狗山周辺は、ミミズバイとスダジイを中心とした暖帯の極相林であり、ヘラシダ、ベニシダなどシダ類を多く観察することができました。まるで太古の森の中にタイムスリップしたようです。被子植物の分類で花が重要なように、シダ類の分類では、胞子の付き方が大切な分類の基準になることなど、観察のポイントが示されました。他にもアリドオシ、ルリミノキ、クチナシ、キチジョウソウなど、出会う植物を次々に解説されてゆく杉野先生の言葉に一同熱心に耳を傾けていました。

一方、野鳥グループに関しては、残念ながらシーズンと時間帯が野鳥を観察するには最悪の時で、目当ての野鳥はほとんど見るできませんでした。しかし、三宅先生の機転で、さまざまな動物の行動跡を追跡するというちょっと変わった嗜好の観察会を味わうことができました。茶色に枯れた杉の葉っぱに混じって、まだ若い青い葉が大木の下に落ちていますが、これはムササビの食事のあとだそうです。また食痕のある杉の実の標本を持参されていましたが、真ん中をかじったものはアカネズミ



樹上にアオダイショウを発見！

によるもの、ふたつに割れているものはリスによるものだそうです。なお、木の枝のうえでアオダイショウとトカゲが向かい合っている場面にも遭遇し、野鳥観察用にもってきた双眼鏡が意外な場面で役に立っていました。

15:00 ごろ、油山寺講堂に再び集合し、大日～油山寺にかけての地層 地質についての説明をして、まとめにかえました。考えてみれば、掛川層群のような比較的若い時代の地層が隆起し、雨 河川の影響で浸食され、多くの谷をもつ丘陵地帯が山地と海岸の間に広く発達することになったことは、いわゆる里山周辺の動植物にとって格好のすみかを提供することになっています。静岡県の地形が、もし山が海にすぐせまるような状態だったら、日本の動物や植物の分布もまったくちがったものになっていたかもしれません。ゆたかな遠州の里山の舞台は、約 200 万年前の海底からすでに準備がはじめられ、現在の身近な動植物相につながっていることを少しだけでも意識していただけたのではないかと思います。

今回の企画にあたり、袋井市教育委員会学校教育課のみなさまには、市民への広報やバスの運行などさまざまなサポートをいただきました。油山寺では、講堂の使用や周囲の自然観察について便宜を図っていただきました。また財団法人しずおか産業創造機構には「しずおか少年少女サイエンス・スピリッツ育成活動助成事業」にて援助いただきました。最後になりましたが記して感謝の意を表します。

「田貫湖ふれあい自然塾」施設見学と周辺自然観察会報告

三宅 隆・柴 正博



田貫湖ふれあい自然塾の前で



自然体験ハウスの入口ホール

7月6日(日)、いまにも降り出しそうな天気の下、大人16名小人4名の20名が富士宮市の田貫湖畔にある「田貫湖ふれあい自然塾」前の駐車場に集合し見学会を実施しました。

まず、「自然体験ハウス」に入り、館内の概要の説明を受けました。

この施設は環境省が進めている自然学校の第1号として2000年につくられました。『自然とのふれあい』に重点をおき、専門のスタッフによる自然体験プログラムと、充実した体験のためのビジターセンターおよび宿泊施設を併せ持つハード・ソフト一体型の施設です。自然体験を通じて、自然を楽しみ、学ぶことから、環境保全への関心を高め、それを日常の行動に結びつけることができるよう、さまざまな自然体験プログラムを展開されています。

館内には富士山の自然コーナーがあり、ぬいぐるみの動物などが展示され、溶岩洞窟も再現されています。ここでは専門スタッフによる有料のフィールドガイドや体験プログラムも実施されています。また、敷地内にはコテージも建っていて、宿泊して研修などもできます。

田貫湖ふれあい自然塾の管理運営にあたっては、環境省、静岡県、富士宮市、(財)休暇村協会、(社)日本環境教育フォーラムで構成

する『田貫湖ふれあい自然塾運営協議会』が主体となって管理運営が行われていて、自然観察の指導などは富士宮市の野外活動指導会社の派遣スタッフが行っています。

館内をしばらく見学した後、全員で小田貫湿原に移動し、自然観察会を行いました。植物は杉野孝雄先生、昆虫は高橋真弓先生、野鳥は三宅隆先生と、豪華な講師陣でした。小田貫湿原の動植物の説明を受けた後、木道を歩きながら、ノハナショウブやクサレダマ、ヌマトラノオなどの湿地植物(7ページ参照)や、トンボやチョウの仲間、それにクロツグミ、ホオジロ



蝶の幼虫の食痕を観察する高橋先生



小田貫湿原での野鳥観察

などの野鳥を見ながら、散策を楽しみました。

杉野先生の話では、小田貫湿原は最近湿地の縮小と植生の変化が起きていて、環境変化が急激に進んでいるということでした。その原因としては、湿原のわきの道路にコンクリートの排水溝ができて、小川からの伏流水がなくなったことと、上流にできたキャンプ場の排水などで富栄養化が起きていることが考えられるそうです。このことから、参加者の中で小田貫湿原の植生を中心として生物調査の必要性が議論されました。

小田貫湿原での観察会終了後、「田貫湖ふれあい自然塾」に戻り昼食をとり、午後は田貫湖で静岡県ではここしか残っていないという希少な植物ミツガシワという氷期のレリック（遺存種）の群生地を観察しました。また、湖畔にそびえたつ、山の中にそぐわない豪華ホテル「休暇村 富士」を見て、解散となりました。

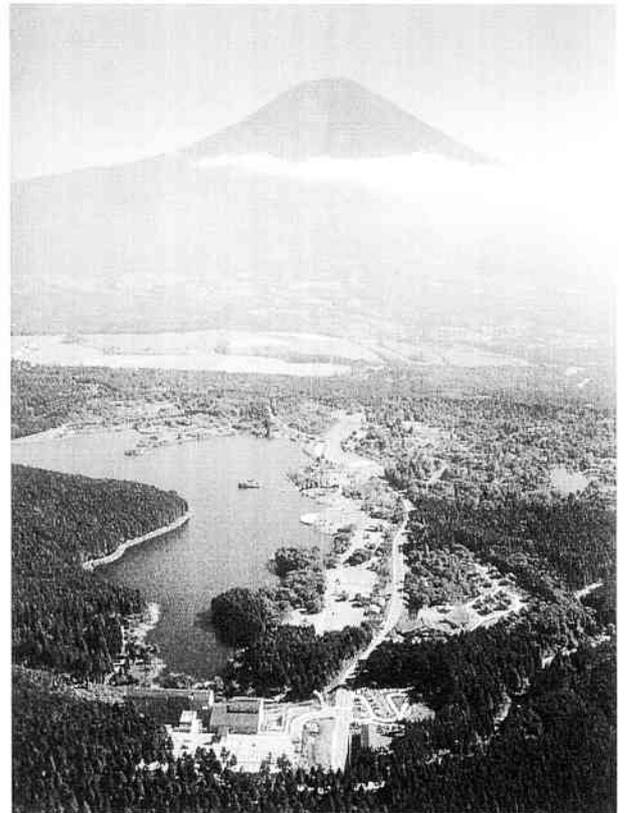
田貫湖は海拔 660m にあり、昔は湿原がひろがり、タヌキがたくさんすんでいたのが狸沼と呼ばれていましたが、昭和 10 年ころに灌漑と発電のために湖がつくられ、現在は東西 1km、南北 0.5km の周囲 4km ほどの大きさです。富士山の眺めがとてもよく、湖面に映る逆さ富士は有名です。

この逆さ富士が見える場所には、見学や写真撮影ができるように湖面にテラスがつくられていました。また、豪華ホテル「休暇村 富士」はその高台にあり、おそらく逆さ富士がよく見えるようにと部屋の窓はすべて富士山の方向に向いていました。

しかし、湖面にテラスが設置されていた場所は、ちょうどミツガシワの群生地で、休暇村の

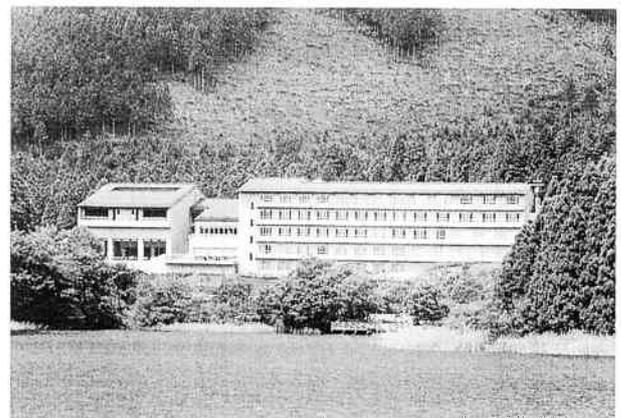
建設やその後の人の踏み込みの増加などで、ミツガシワの湖面での分布範囲が狭められていて、田貫湖全体の植生も変化が生じているということでした。

なお、田貫湖ふれあい自然塾についての問い合わせは、〒418-0107 富士宮市佐折 633-14
Tel 0544-54-5410、ホームページは <http://www.tanuki-ko.gr.jp/> です。



国民休暇村「富士」富士山を望む湖畔のリゾート
(休暇村「富士」のパンフレットより)

湖畔の南側には休暇村「富士」というホテルまで舗装道路がつき、手前右側が「田貫湖ふれあい自然塾」、左側にはキャンプ場があり、リゾート化されている。



国民休暇村「富士」と逆さ富士の展望テラス
(休暇村「富士」のパンフレットより)

小田貫湿原で見られる植物



ヤマゲク



シモツク



オカトラノオ



ヌナズミトラノオ



カナダハギ



ノボナショウブ



ミツガシク



アサマフクロ



クサレタマ

静岡県の昆虫（2）

桶ヶ谷沼のベッコウトンボ

福井 順治

(野路会・桶ヶ谷沼を考える会)



ベッコウトンボはトンボ科に属する中型種で、羽の斑紋と体色がべっこうに似た茶褐色～黒褐色であるためにこの名があります。成虫は4月から6月の春季に池沼に出現します。国内では宮城県以南の本州、四国、九州に分布していましたが、各地で減少・絶滅が相次ぎ、既に絶滅してしまった都府県が多いため、現在では極端に遺存的な分布となっています。特に1980年代～90年代にかけては衰退が顕著で、中部以東の本州の都県では静岡県を除いてすべて絶滅し、近畿以西の本州と四国でも兵庫、山口両県以外では姿を消しました。このため環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅰ類に記載されるとともに、1994年3月には「種の保存法」の国内希少野生動植物種の指定を受け、採集や標本の譲渡が制限されています。

静岡県内では、かつてはほぼ天竜川下流付近にあたる6市町に生息記録がありましたが、現在では磐田市以外では確認できなくなっています。このため残された磐田市の桶ヶ谷沼・鶴ヶ池の産地は本州の中部地方以東では唯一の生息地となってしまいました。桶ヶ谷沼は、ベッコウトンボの安定多産地として静岡県自然環境保全地域に指定され、環境保全がはかられてきました。行政、地元と保護団体で構成する「桶ヶ谷沼管理運営委員会」は、県・市の予算で運営され、植生管理、観察路の整備などの直接的な保全活動の他に、動植物の現況調査を継続して行っています。このような委員会が設置され保全の取り組みがなされているのは、本種が残っている生息地の中でも桶ヶ谷沼だけで、全国の先進的モデルとなっています。

安定して多産を続けてきた桶ヶ谷沼ですが、ここ数年はアメリカザリガニの大発生によって発生数が激減し、絶滅の危機が訪れています。もちろんすぐに対策も立てられ、1999年夏からは、一般市民に参加を呼びかけて、「ザリガニ釣り」による大規模な捕獲作戦を行われ、その夏だけで約2万頭が捕獲されました。捕獲作戦は翌年2000年以降も続けられて恒例行事になってきましたが、まだアメリカザリガニの個体数は多いため、食害を受けた沼の水生植物などは回復していません。この他に本種の個体群を維持する対策として、産卵誘致による増殖法を行うこと、及び生息地の孤立化を防ぐ対策を立てることも並行して推進していきたいと考えています。

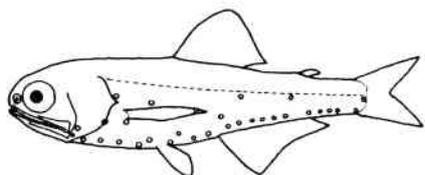
静岡県の淡水生物 (2)

イツセンヨウジ

板井 隆彦 (静岡淡水魚研究会)

筆者の研究室が静岡市清水興津の興津川の中流部、下流部および河口で定期的にハゼ科魚類を調べ始めてから7年目になります。長らく調査を続けていると、ときに驚くような珍しい魚と出会うことがあります。

もっとも驚かされたのはハダカイワシで、2000年の夏に河口の調査で見つかりました。この深海性の魚の査定は発光器の数や配置で行うので、筆者の手に負えず、神奈川県立自然史(生命の星・地球)博物館にもちこみ、研究員の瀬能宏さんの手を煩わして、やっとイワハダカとわかりました。サクラエビがいるような深いところにすむこの魚が興津川の河口に現れたのには、どうやら台風で海荒れしたことが関係したようです。それにしても、ほぼ純淡水のところよく生きた状態で見つかったものです。



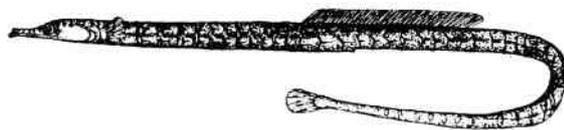
イワハダカ (中坊, 2000より改写)

今年(2003年)の7月の下流部の調査で手網の中に1本の10cmばかりの枯れ枝のようなものがはいりました。覗くとゆるゆる動きまわります。すぐヨウジウオとわかり、魚の形やとれた場所からイツセンヨウジではないかと推測しました。後に研究室で再度同定した結果、やはりイツセンヨウジに間違いはありませんでした。筆者は興津川では断続的ではありますが25年にわたり調査をしてきました。が、この川でヨウジウオ類を見たのは初めてです。

静岡県の河川域からヨウジウオ類はこれまで4種記録されており、すべて静岡県のレッドリストの要注目種に位置づけられています(静岡県環境森林部自然保護室, 2003)。この4種とは、テングヨウジ属(*Microphis*)のテングヨウジ(*M. brachyurus brachyurus*)とイツセン

ヨウジ(*M. leiaspis*)、カワヨウジ属(*Hippiichthys*)のカワヨウジ(*H. spicifer*)とガンテンイシヨウジ(*H. penicillus*)です。

筆者が河川でヨウジウオ類を最初に見たのはイツセンヨウジで、1978年の伊豆半島の岩科川下流の調査で採れました。しかしイツセンヨウジは古宇川など数河川で見つかった後、ほとんど見つからなくなり、入れ替わるように太田川下流域を皮切りに続々と見つかり始めた物の長いテングヨウジばかりとなっていきました(板井, 1982; 金川, 1988など)。カワヨウジやガンテンイシヨウジも見つけれられてはいますが、テングヨウジに比べるとかなり頻度は低いものです。



イツセンヨウジ (板井原図)

これら4種のヨウジウオのうち、イツセンヨウジとテングヨウジは両側回遊魚的な生活環をもつようで、瀬能(2001)は回遊魚として位置づけており、筆者も静岡県の淡水魚の生活環区分を行ったときに、やはりこれらを両側回遊魚に含め、カワヨウジおよびガンテンイシヨウジは広塩性周縁魚に含めました(板井, 1995)。しかしほとんどが南方性であるこのヨウジウオ類は、いずれの種も静岡県内では生活環を議論できるほどには多くの個体が得られておらず、そもそも静岡県の河川への定着も不確実なものが多いのです。

とはいえ、イワハダカのように明らかに偶来的なものとは違い、琉球列島などから黒潮を通じ絶えず供給されており、テングヨウジなどは近年発見される頻度が高まりつつあるところから、ヨウジウオ類のいくつかの種は温暖化の進行とともに定着していくに違いなく、生態もわかってくると思われます。

インフォメーション

「なんだろ隊が行く駿河湾おさかな図鑑」

静岡新聞社編、

(四六判 208 ページ、1800 円+税)

静岡新聞社出版局から、駿河湾に生息する 310 種の魚類をカラー写真で紹介したミニ図鑑「なんだろ隊が行く！駿河湾おさかな図鑑」が発売されました。

執筆陣に駿河湾研究で傑出した実績を誇る東海大学海洋学部の諸先生を迎え、身近ながら意外と知られていない駿河湾とそこにすむ魚類について、小学生から年配の方まで楽しく理解できるよう、やさしく丁寧な解説でまとめてあります。

磯、砂浜、河口、沖合表層、陸棚、中深層、深海底の七つの環境ごとに、普段見ることができない深海魚など興味深い魚種を豊富に紹介。また、実際に観察や調査をしたいときに役立つフィールドガイドも収録し、単なる図鑑にとどまらない、磯遊び、ダイビングなどのレジャーガイドとしても活用できます。

ほかに、寿司職人が教える魚のおいしい食べ方や駿河湾限定のおさかなお菓子図鑑など、コラムも満載です。



現在書店で発売中、本書の問い合わせは同社出版局〈電話 054 (284) 1666〉へ。

(本文は静岡新聞社出版局の小澤詠子さんに執筆をお願いしました。)

自然研究会 自然保護団体の紹介

遠州自然研究会

遠州自然研究会は、1972年(昭和47年)5月に発足しました。発足以来31年も続く伝統ある会です。会の目的は、遠州地方を中心に静岡県の自然を研究し、自然の保護活動を行うことです。そのため、主として遠州地方の生物の調査、自然環境の調査、自然保護活動、会誌会報の発行、調査会 観察会の開催、展示会の開催など、調査研究に加え多くの啓蒙啓発活動を行っています。さらに、本会は浜松市の環境関係の市民会議にも参加し、中心メンバーとして認められています。

現在の会員は130名。植物、昆虫、鳥類、魚類など、各分野を専門としている人々が所属しており、それぞれ各自に活動しています。また会の活動として、現在は天竜市大栗安の棚田植物の調査、県立森林公園を中心とした湿地の復元作業、浜松市富塚町椎ノ木谷の調査と保全活動、佐鳴湖の周辺環境調査などを行っています。

毎年9月には遠州自然展を催し、調査研究の成果を発表してきました。会誌「遠州の自然」は毎年1回発行し、これまで発行した会誌は26号を数えます。会報はほぼ2ヶ月に1回発行、すでに148号に及んでいます。本年は、ホームページも立ち上げました。

入会希望およびご意見・ご質問などは事務局の鈴木満帆(053-472-2480)まで、または、ホームページ(URLは<http://www.s-palette.jp/~s115ennsyu/>)をご覧ください。

静岡昆虫同好会創立 50 年を記念して 「静岡県の蝶類分布目録」を出版

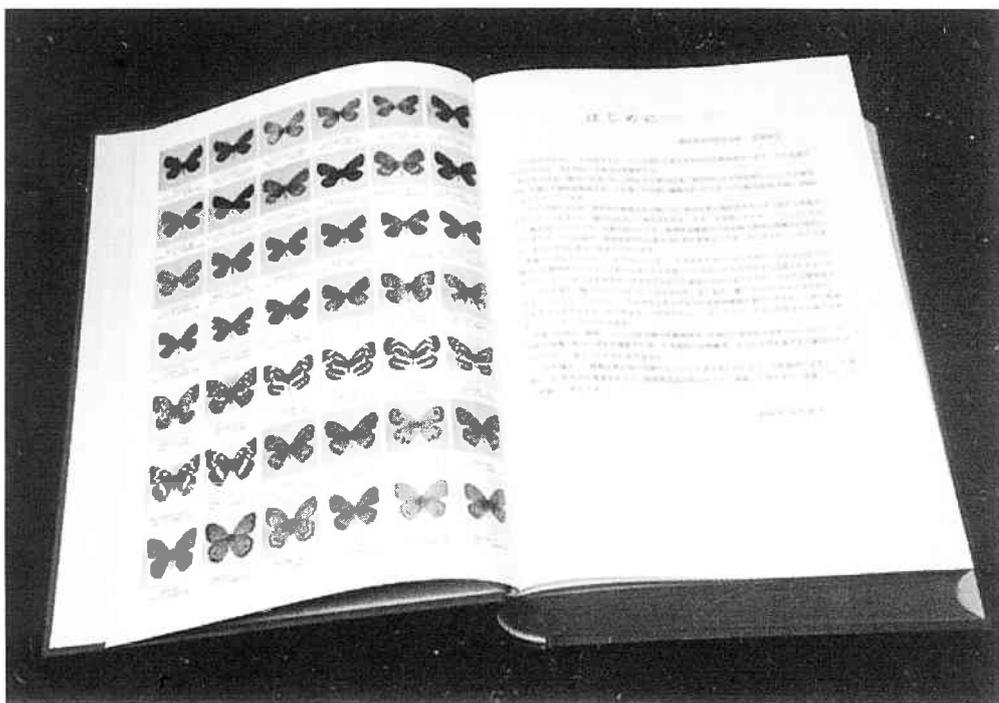
諏訪 哲夫

静岡昆虫同好会の歩み

1953（昭和 28）年 5 月、当時大学 1 年の高橋真弓さんが中心となって、郷土の昆虫相を開拓することを目的に、静岡昆虫同好会が創立されました。茶色に変色し、紙質が粗末なため触ればすぐに破けてしまう同会の会誌「駿河の昆虫」の創刊号をみると、連絡及び編集係高橋真弓、庶務係兼会計係細谷恵志、会員は総勢 17 名です。中学 1 年生の北條篤史さんらが最年少で、高校生と大学生がほぼ半数づつ、現在の会員構成とはまったく逆です。年会費は 120 円、入会金 20 円となっています。

会誌「駿河の昆虫」は静岡県とその周辺地域についての投稿を原則として、長文の調査 研究報告と短報から構成されており、このスタイルは現在もまったく変わっていません。これまで報告された内容を 10 年ごとを見るとそれぞれの時代の会員の関心事や特徴が現れており大変興味深いものがあります。1950 年代は安倍

川上流、南アルプス、富士山麓などの未調査地域の分布調査が精力的に行われました。また 1955 年突然大発生したクロコノマチョウの調査が極めて綿密に行われたのもこの時からです。1960 年代は静岡県における詳しい調査がさらに続けられたのと平行して、山梨県の各地の調査も行われるようになりました。1970 年代になるとギフチョウの食性の研究や蝶の訪花習性の調査のほか、キマダラヒカゲについては平地型 山地型といわれていたものが実はサトとヤマの 2 種であるとの新発見など、生態や分類の分野まで踏み込んだ高度な研究がなされました。1980 年代ごろから蝶以外の甲虫、トンボなどの報告が多くなりました。ミドリシジミ類やスギタニルリシジミなどの詳細な分布調査も行われました。このころから草原性蝶類の減少が著しくなりましたが、逆に南に住むツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、ムラサキツバメなどに関する報告が 1990 年代以降になって急増します。



会員の郷土の昆虫相説明に向けての情熱とひたむきな気持ちに支えられて会誌は順調に発行されてきました。年4回発行、100ページのペースを何とか守って、記念すべき50年が経過し、200号、5,606ページとなりました。

「静岡県の蝶類分布目録」の発行

同好会では1978年、創立25周年記念の事業の際には会誌100号に蝶類6種、蛾類ヤガ科、カミキリ、ハチ、ショウジョウバエ、半翅目セミ科、トンボ、直翅目について、これまでの分布調査結果等をまとめた総説を掲載しました。このときから25年が経過しましたが今度は50年の節目にふさわしいものとしてかねてから懸案でもあった“総データを整理すること”で「静岡県の蝶類分布目録」の出版が決定されました。

しかし予算はどのくらいかかるか、データ入力にどのくらいの時間が必要か、内容をどうするかなど多くの問題がありましたが、会員をはじめ多くの方がたのアドバイスをいただきなんとか動き出したのが1998年でした。パソコンについての知識がまだほとんどない私は、機械の購入方法すらわからなく、入力をはじめとして取り扱いの基礎知識の習得にも苦勞し、わからなくなるとは電話で応援を求めることも何度かありましたが、4年ほどで何とかデータだけは入力を完了しました。総レコード数は45、

865件でした。改めて会員の皆さんがよくこのように多くの原稿を投稿してくれたものだと感心した次第です。

「静岡県の蝶類分布目録」の内容

この目録は次の4項目①現在ほとんど採集が困難な産地の歴史的標本のカラー写真 ②種別分布調査データ ③市町村別分布調査データ ④種別分布図(分布の変動が著しい種は報告された静岡県の種類数は153種(迷蝶13種を含む)、山梨県145種(迷蝶1種を含む)、全部で161種、県別のレコード数は静岡県30、199、山梨県14,307、長野県816、愛知県253、神奈川県160、その他130となっています。静岡県の全市町村から記録はありますが、海岸平野部からの報告は迷蝶などごく限られたもののみとなっています。なお旧静岡市からのデータが最多で11,491件、次いで富士宮市4,031件です。

参考にこの本の体裁はA4判、1,368ページ、上製箱入り、カラー図版2ページ、分布図249図、会員価格11,000円非会員価格13,000円(送料込み)となっております。もし、興味のある方は以下の連絡さきへご連絡ください

〒420-0815

静岡市上沓谷町14-9 諏訪哲夫

(Tel & Fax 054-247-6524)

蝶の風景

清 邦彦

このたび「蝶の風景」(B6版約130ページ)を個人出版しました。十数年前から描きためた蝶や蝶に似合いそうな風景のペン画に文を添えたイラストエッセイです。

ギフチョウや富士山麓の草原性蝶類についてのまとまった部分もありますが、他は、チョウの雑学、人と自然のとの共存、自然教育など、さまざまなことについての思いを短い文で表したものです。郵送料を含め900円(手渡しで700円)です。

ご希望の方は下記口座に郵便振替でご入金くださればお送りいたします。

郵便振替口座 00890-1-52237 清 邦彦

蝶の風景

清 邦彦

